

1. 調査の概要

■ 調査対象

2016 年度秋学期の卒業生全員

■ 調査期間と方法

2016 年度の卒業式の当日にマークシート式の調査票を配布し、その場で回答してもらった

■ 主な調査項目

- 校風や教育方針が合っていたか
- 学修や大学生活等への満足度
- 身についた能力
- 大学での成長実感や達成感
- 学生生活で入れて取り組んだこと
- 成長のきっかけとなったこと
- 卒業後の進路について

■ 回収状況

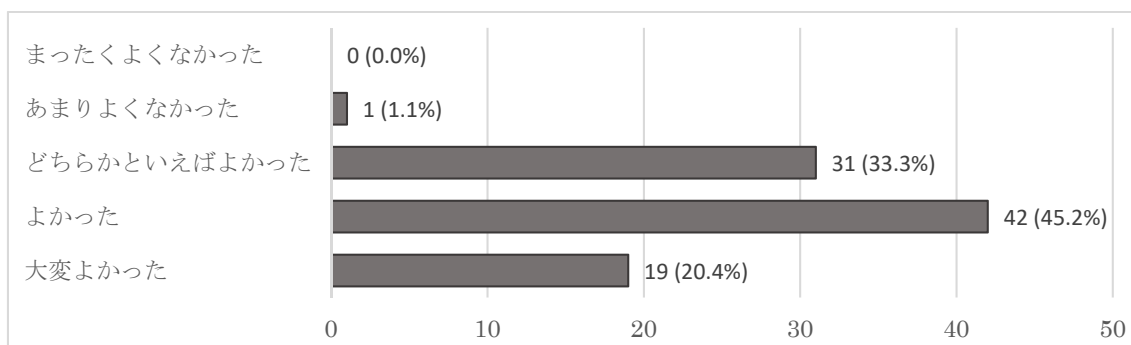
2016 年度秋学期の卒業生 108 名のうち、86.1%にあたる 93 名から回答を得た。

【表 1】 回答の状況

	度数	割合
男性	34	36.6%
女性	59	63.4%
合計	93	

2. 入学してよかったか

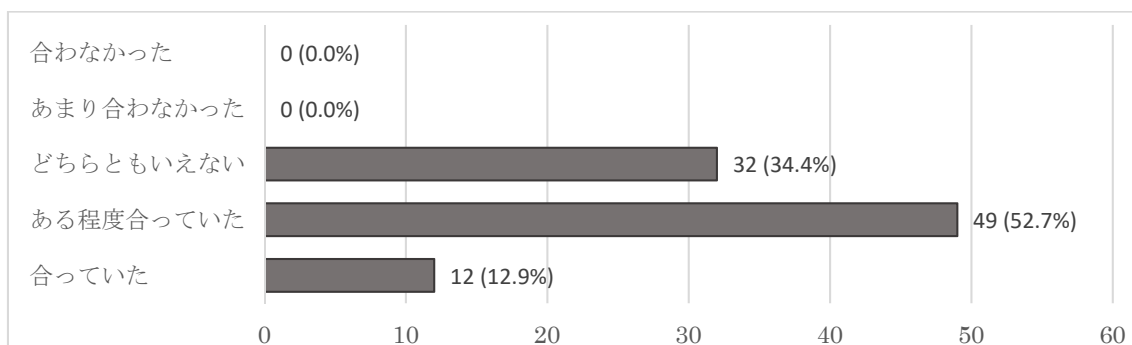
本学に入学してよかったかどうかをたずねた。全体としては「よかった」という回答が最も多く約半数となり、「大変よかった」という回答も 2 割程度ある。全体として、ポジティブな回答がかなり多いことがわかる (図 1)。



【図 1】 本学に入学してよかったか

3. 校風や教育方針が合っていたか

入学してみて、本学の校風や教育方針が合っていたかどうかをたずねたところ、ネガティブな「合わなかった」という回答はみられなかった。一定数の「どちらともいえない」という回答はみられるものの、校風や教育方針が合っていたという回答が多い（図2）。

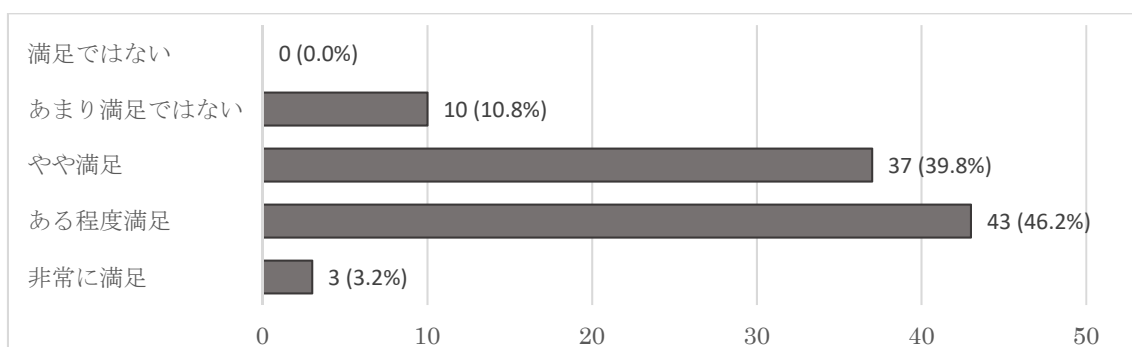


【図2】 本学の校風や教育方針が合っていたか

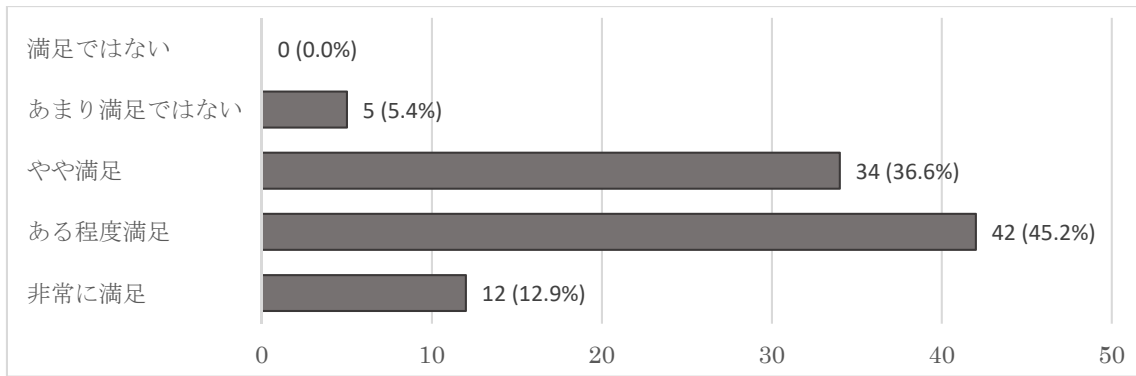
4. 大学生活における満足

大学生活に対する満足度として、学修に対する満足度をたずねた。両極にある「非常に満足」や「満足ではない」という回答は少なく、「やや満足」「ある程度満足」という回答が多い。全体的な傾向として学修に対して満足はしているものの、満足度が非常に高いわけではないようである（図3）。大学生活全般に対する満足度についても同様の傾向であるが、学修に対する満足よりもやや高いようである（図4）。

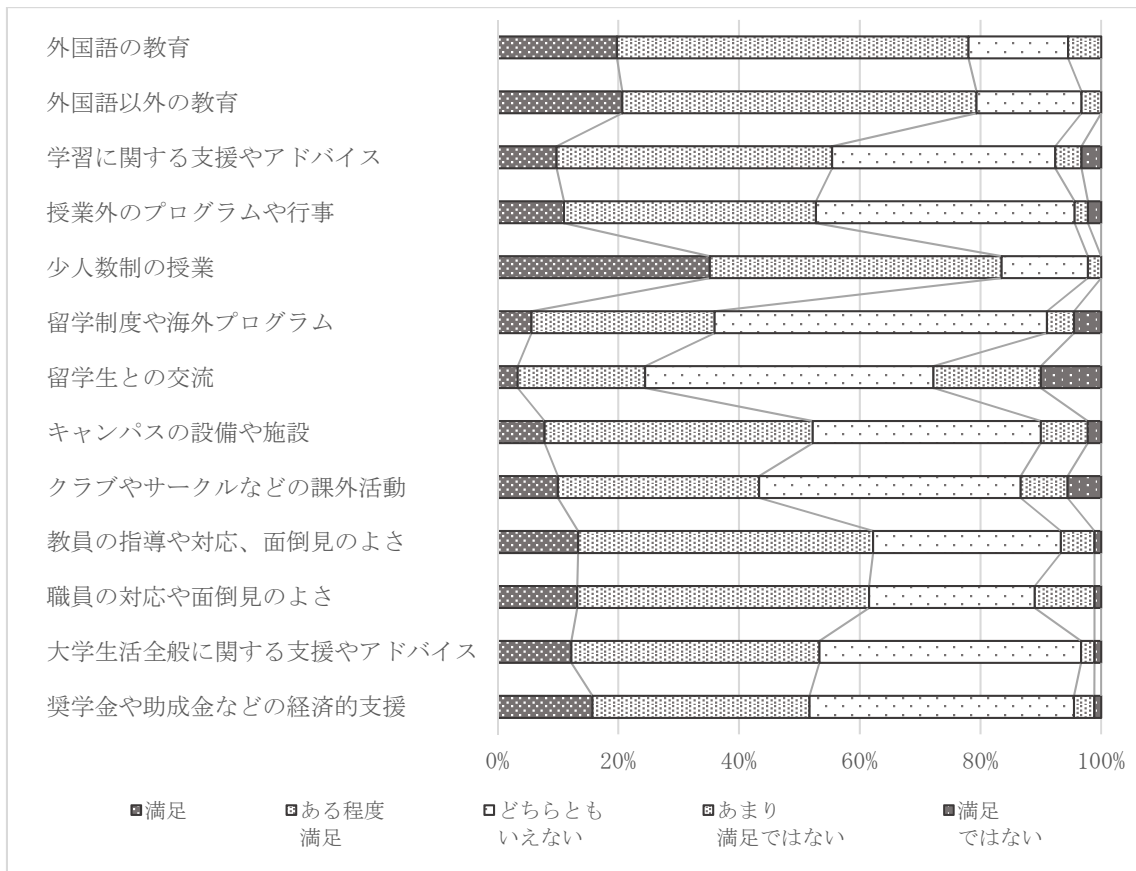
大学に対する満足を個別の項目についてたずねると、満足度が高いのは「少人数制の教育」や「外国語の教育」「外国語以外の教育」などとなる（図5）。教育の内容や方法に対しての満足度が高いようである。他方で、その他の項目は満足度がさほど高くはなく、「どちらともいえない」という回答が多い傾向がある。短期大学では正課外での活動を行う時間が少ないため、教育に対する満足以外では大学に対して満足や不満を感じる場面が少ないのだろう。



【図3】 学修に対する満足度



【図 4】 大学生生活全般に対する満足度

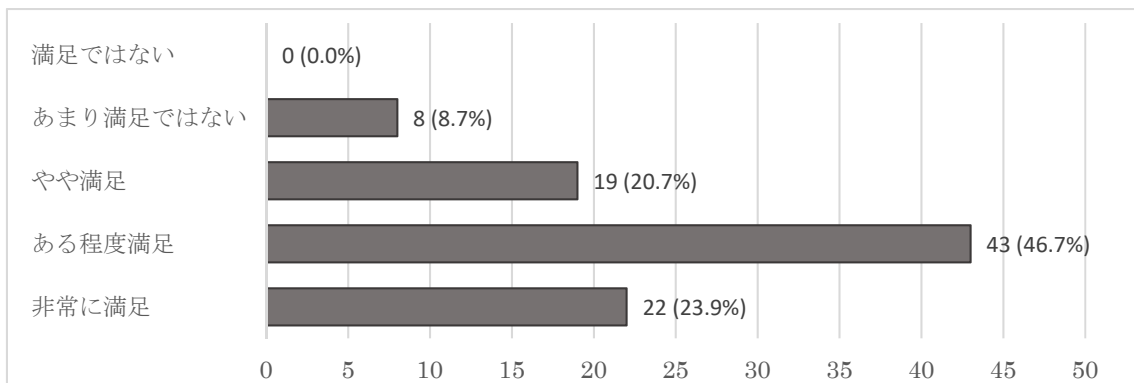


【図 5】 大学に対する満足

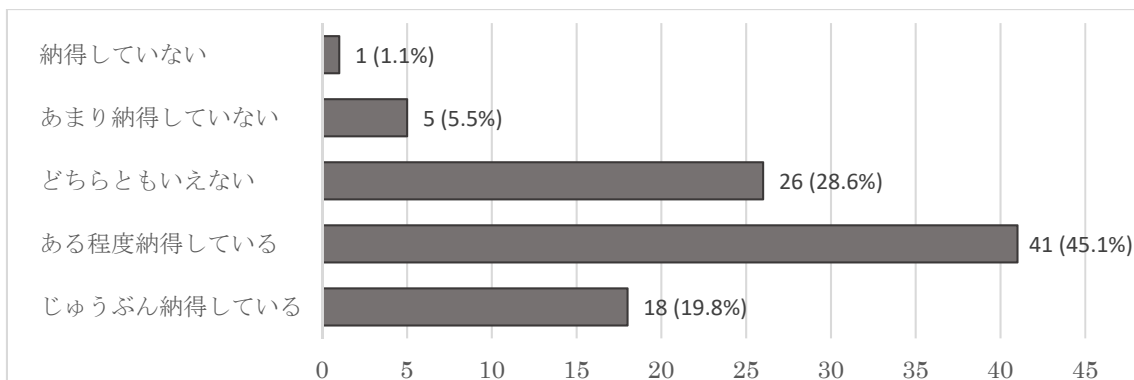
5. 卒業後の進路について

卒業後の進路についての満足度をたずねると、「ある程度満足」という回答が約半数を占めており、非常に満足している人も約 25%いる（図 6）。卒業後に進路に対しては、総じて満足しているようである。進路を決めるプロセスについての納得度も、進路の満足度ほぼ同様に多くの人がある程度納得をしている（図 7）。

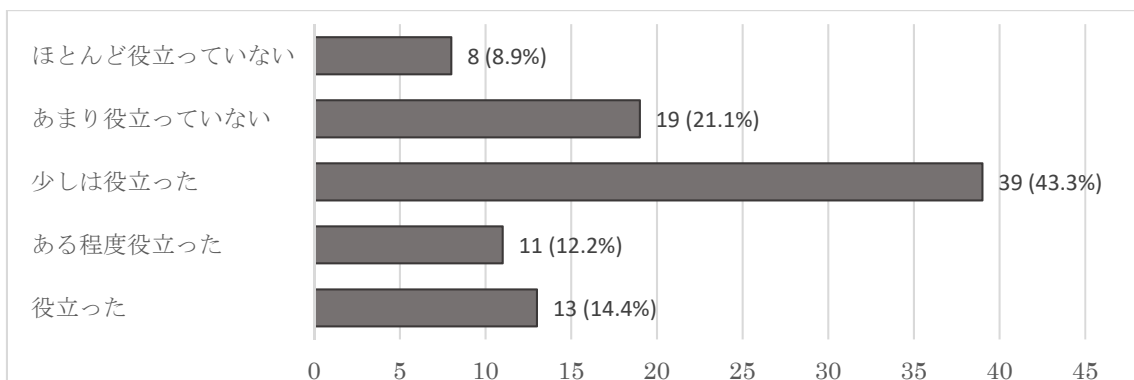
進路を決めるにあたって、キャリアセンターをはじめとした大学の支援やアドバイスが役立ったかどうかをたずねると、中間の評定である「少しは役立った」への言及が最も多い（図 8）。進路選択における大学の支援は、役立っていないわけではないが、はっきりと手ごたえを持って役立っているともいえないということだろうか。



【図 6】 卒業後の進路に対する満足

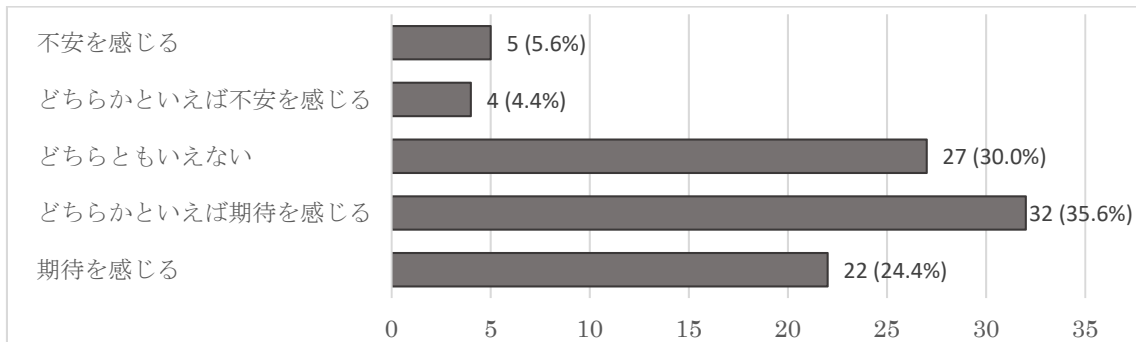


【図 7】 就職活動など卒業後の進路を決めるプロセスや結果に納得しているか

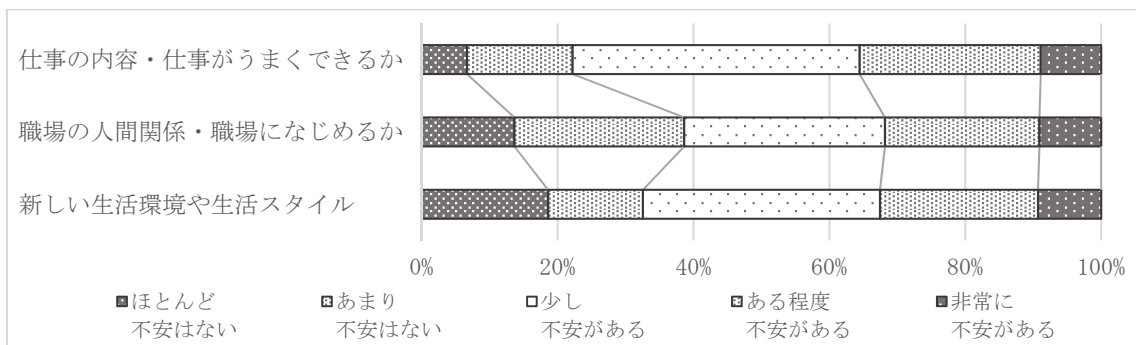


【図 8】 就職活動などで大学の支援は役立ったか

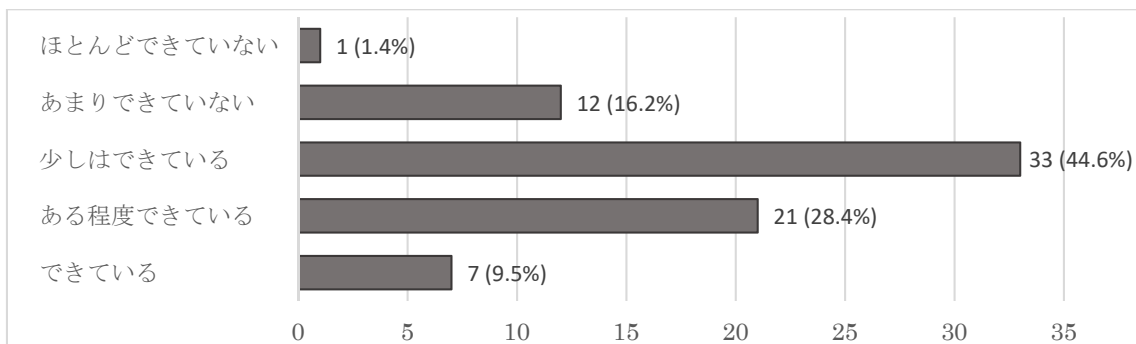
卒業の進路に対しては、「どちらともいえない」との回答も多いが、全体としては多くの人がポジティブに期待を感じているようである（図 9）。卒業後に就職する人に就職に対する不安をたずねると、多くの人は何らかの不安を感じるようである（図 10）。新たな進路に進むにあたっての心構えや社会人としてやっていく自身をたずねると、いずれも多く正規分布に似た中間的な回答が多い分布となる（図 11、図 12）。多くの卒業生は、進路に対して自信と不安が入り混じっているのだろう。



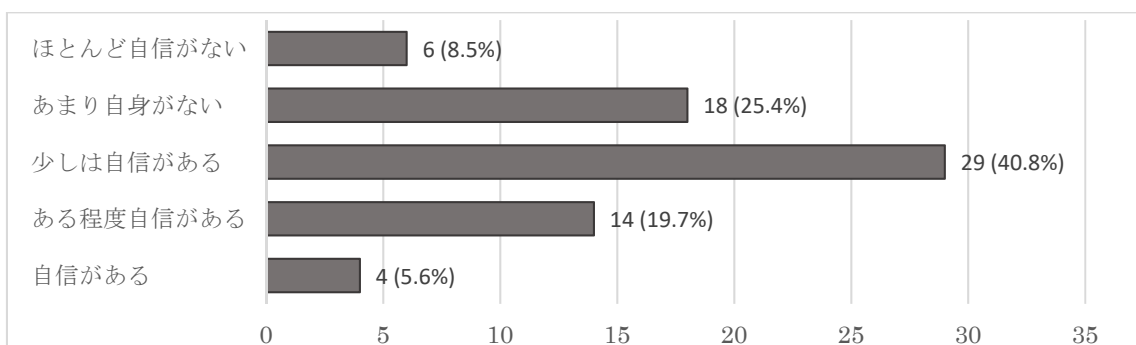
【図 9】卒業後の進路に期待や不安を感じるか



【図 10】就職に対する不安（就職する人のみ）

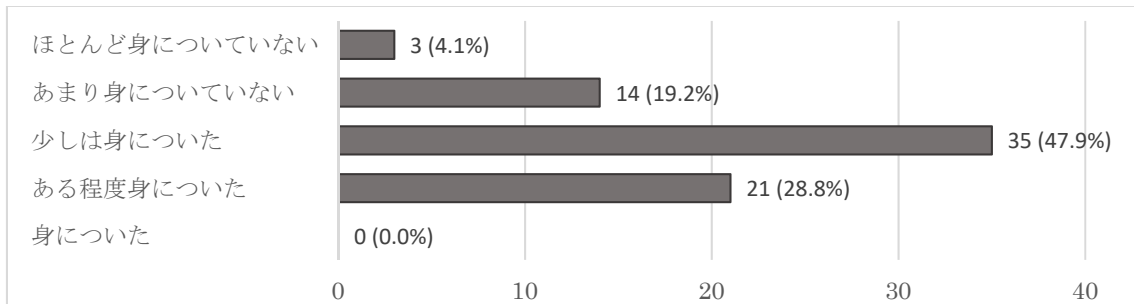


【図 11】卒業後の進路に向けた心の準備ができているか

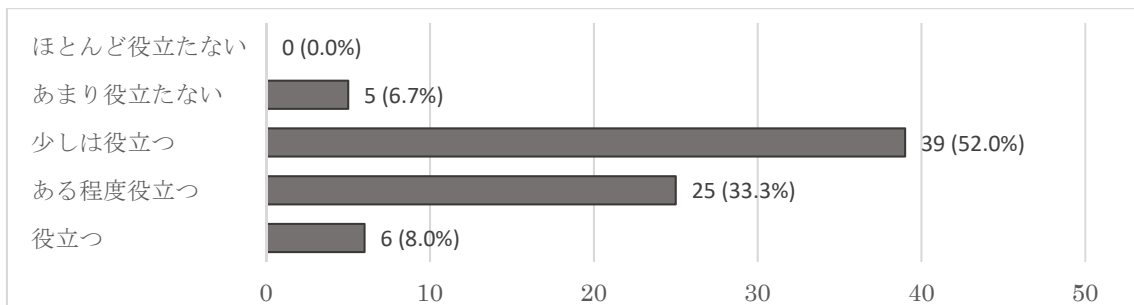


【図 12】社会人としてやっていく自信

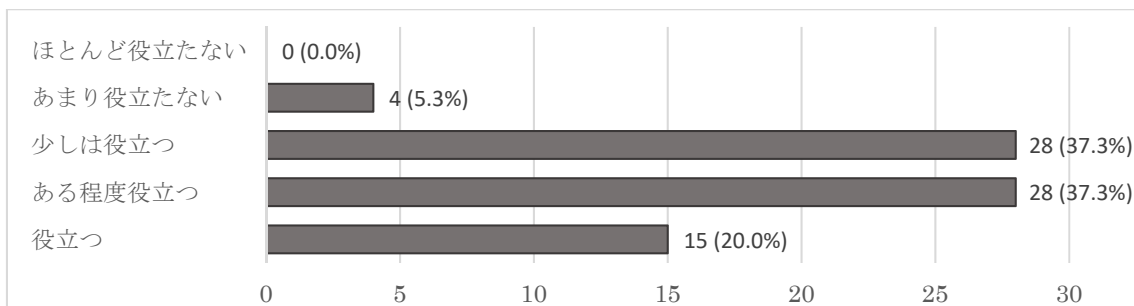
卒業して社会に出るにあたって、社会人として必要な能力が大学で身についたかをたずねると、多少は身についたと感じる人が多いものの、身につけていないという回答も2割程度いる(図13)。大学で学んだことが社会に役立つかどうかについては、全く役立たないわけではないが、目に見えて役立つと感じられているわけでもないようで、「少しは」あるいは「ある程度は」役立つとの認識が多い(図14)。それに対して、勉学に限らず大学で経験したこと全般については、勉学よりもやや役立つと考えられているようである(図15)。大学での学びは、勉学だけではなく課外の活動も含めた大学生活全体が、学生を成長させているということだろう。



【図13】社会人として必要な能力が大学で身についたか



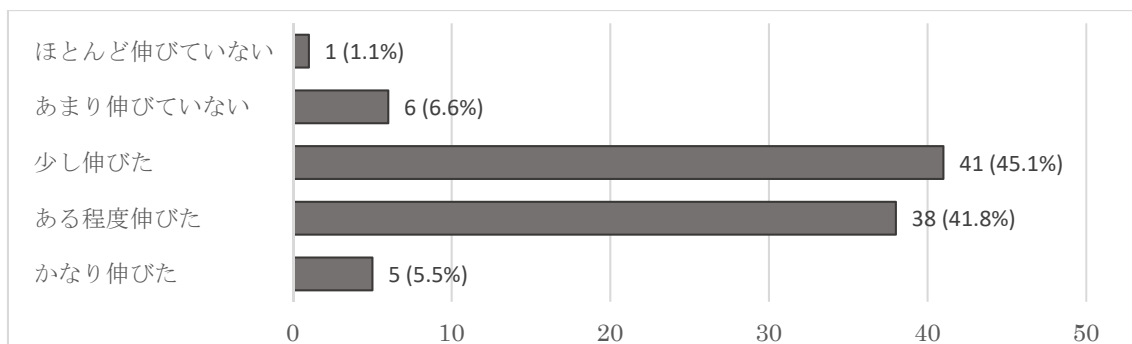
【図14】大学で学んだことは社会で役立つか



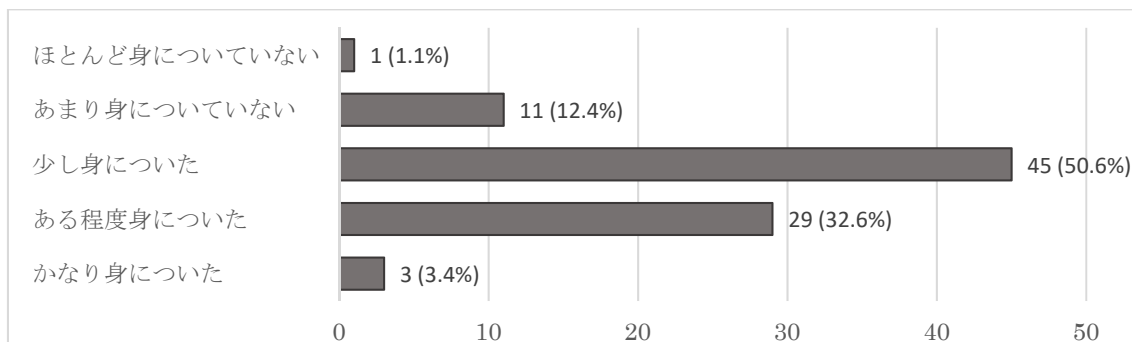
【図15】勉学に限らず大学での経験は社会で役立つか

6. 外国語の修得状況

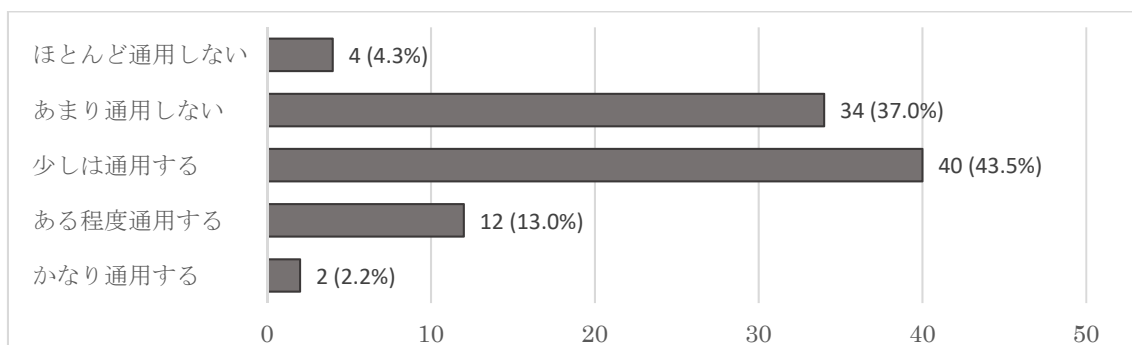
大学で外国語の運用能力が伸びたかどうかをたずねた。まず英語の運用能力については、「少し伸びた」「ある程度伸びた」との回答が多いが、「かなり伸びた」という回答はわずかである(図16)。大学生活を通して英語の運用能力が伸びたという実感はあるが、2年間という短い期間では「かなり伸びた」というほど手応えが感じられないのかもしれない。これと対応するように、外国語の運用能力が社会で通用するかどうかをたずねると、あまり自身は持てないようである(図18)。



【図 16】英語の運用能力が伸びたか



【図 17】英語以外の外国語能力が伸びたか

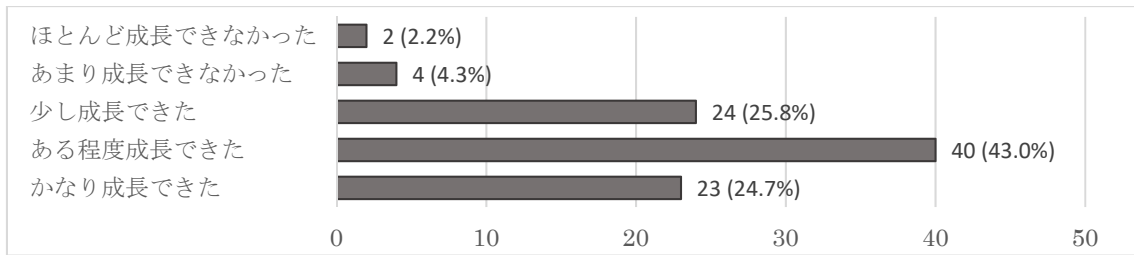


【図 18】自分の外国語能力は社会で通用するか

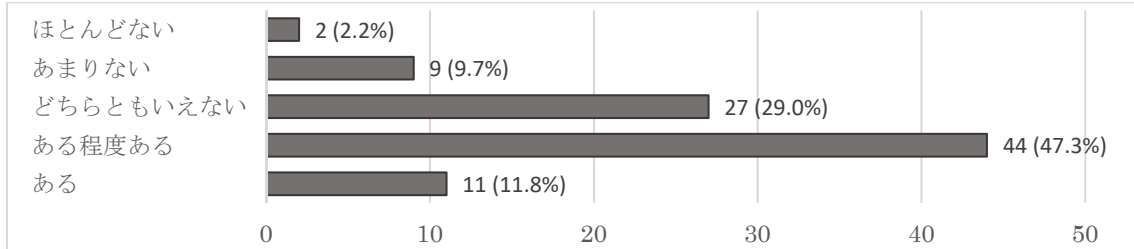
7. 成長の実感や達成感

大学生活を通して、総合的にみて自分がどの程度成長できたのかをたずねたところ、多くの人が何らかの形で「成長した」と感じていることがわかる（図 19）。同様に、達成感についてたずねると、勉学においてもそれ以外においても、ある程度達成感を感じており、比較的充実した大学生活を送っていたことがうかがえる（図 20・図 21）。

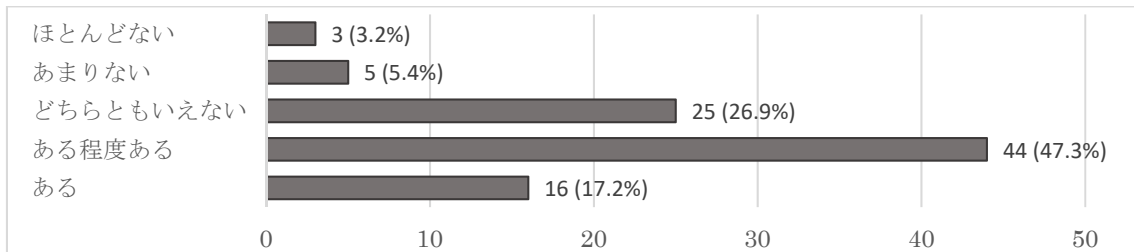
成長のきっかけについてたずねると、「アルバイト」への言及が最も多くなる（図 22）。社会との直接的な接点となるアルバイトは、成長の実感がもちやすいきっかけなのだろう。アルバイト以外では、「よい先生に出会ったことや指導を受けたこと」「友人との出会いや刺激」「授業で難しい課題を乗り越えたこと」などが成長のきっかけとして言及が多い。学生の成長において、教員の役割は大きいことがうかがえる。また同時に、ともに学ぶ仲間存在も重要な要素となっているようである。



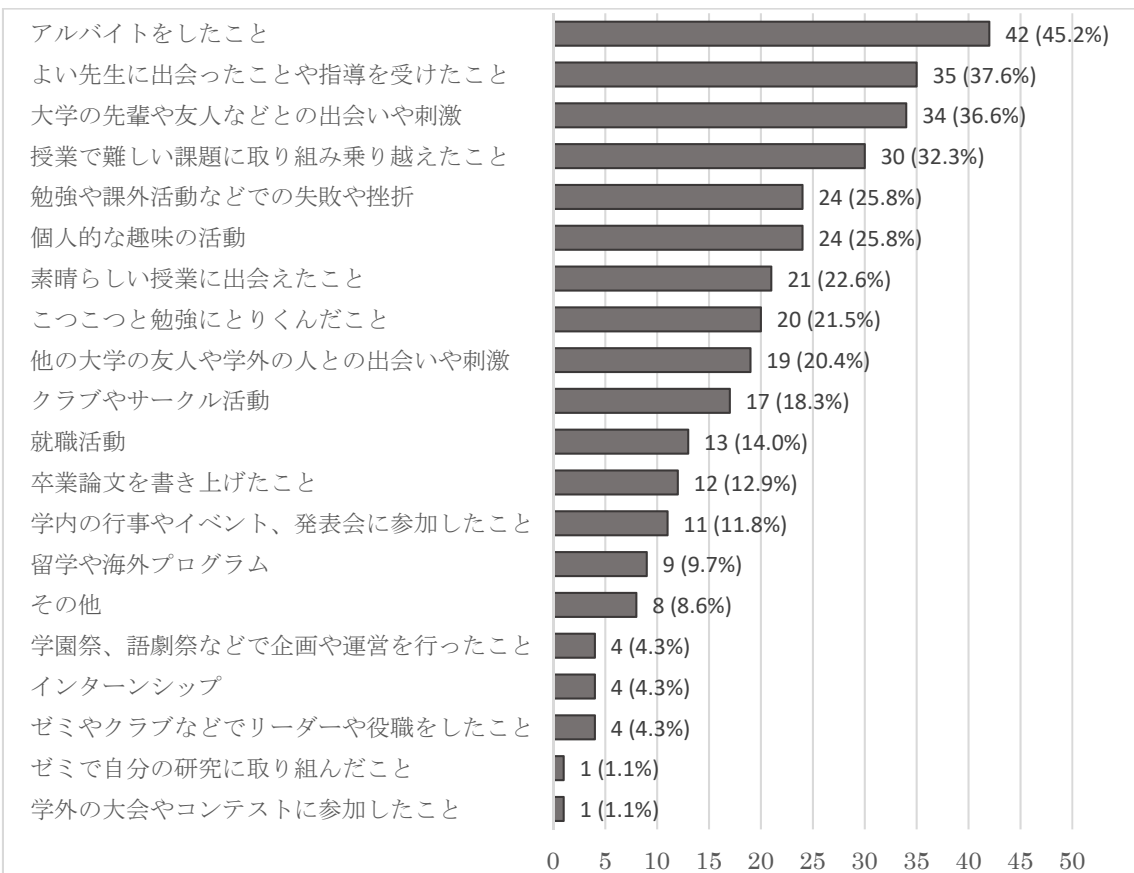
【図 19】大学での総合的な成長の実感



【図 20】大学での勉学における達成感



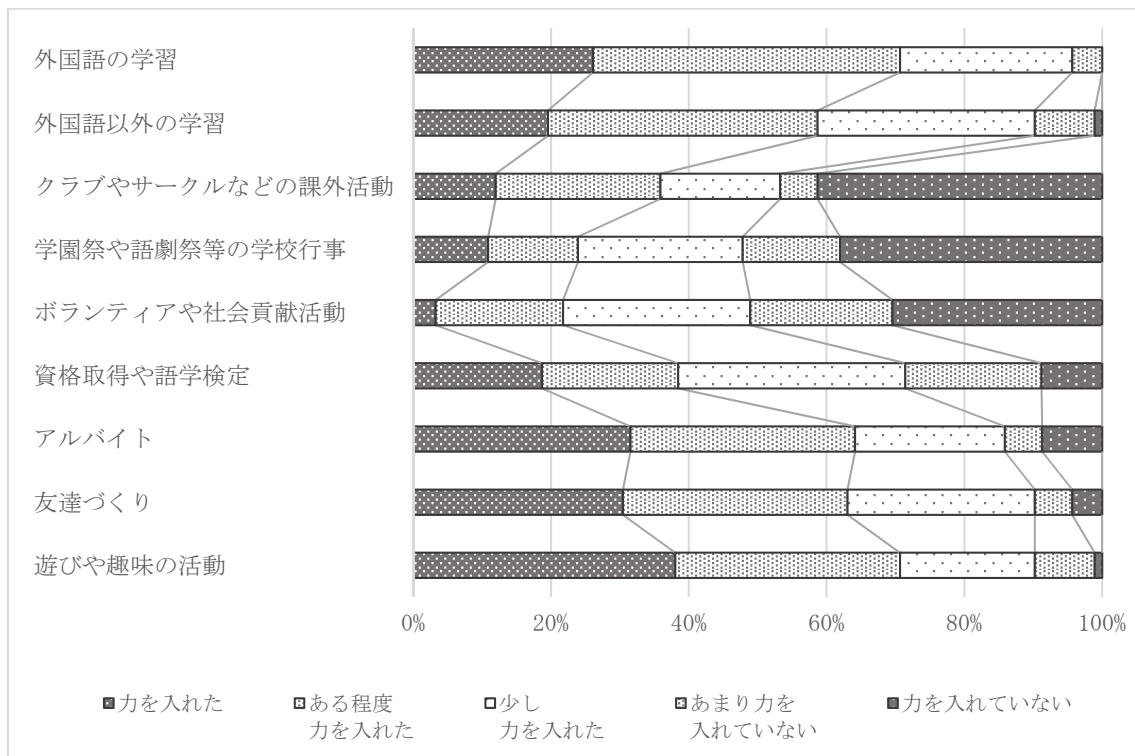
【図 21】勉学に限らず大学生活での総合的な達成感



【図 22】成長のきっかけ

8. 大学生活で力を入れた取り組み

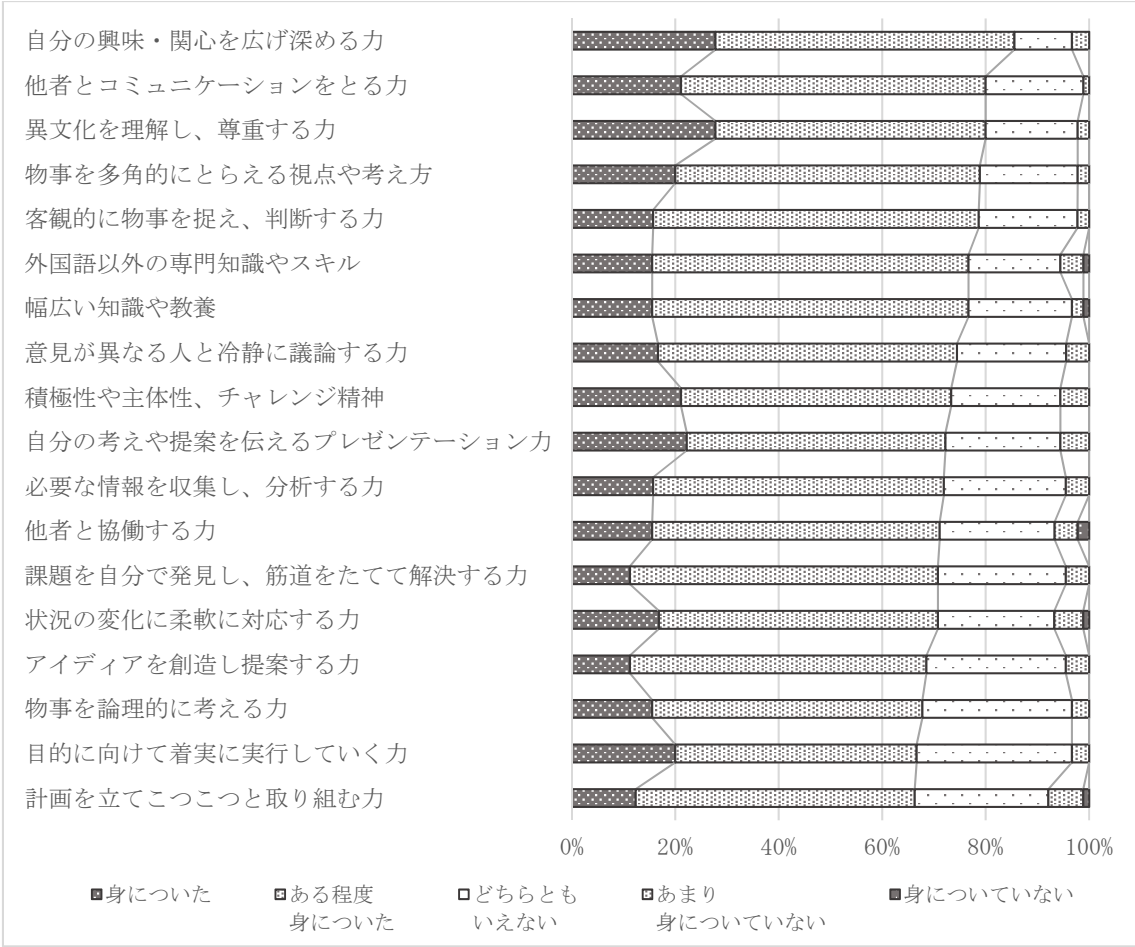
大学生活で力を入れた取り組みについてたずねた。外国語の学習については、多くの人が力を入れて取り組んできたことがうかがえる。また外国語以外の学習についても、外国語よりやや低いものの、それなりに力をいれて取り組まれていたようである。しかし、大学での課外活動については、あまり力はいれられていないようである。短期大学は短い期間に授業が集中することや、夜間が中心であること、他に仕事などをしながら通う人なども多いことから、課外の取り組みはあまり力が入れられないようである。それ以外では、アルバイトや友達作りなどには力が入れているようである（図 23）。



【図 23】成長のきっかけ

9. 身についた能力

大学で身についた能力についてたずねた。いずれの能力についても、多くの人が「ある程度」以上は身についたと感じているようである（図 24）。また、いずれの能力についても身についた実感についてさほど大きな差はみられない。その中で相対的に身についた実感が大きなものが、「興味・関心を広げる力」「コミュニケーション能力」「異文化理解力」などである。異文化理解やコミュニケーション能力は本学の教育の大きな柱の 1 つであり、それが身についたと感じられていることは好ましいといえるだろう。また、興味・関心を広げる力は、大学生活を通して視野が広がったということだろうか。



【図 24】身についた能力